

4. 考察

今回の調査では、市内13地域を重点調査地域としてコウチュウ類とチョウ類を対象に現地調査を行った。結果、コウチュウ類69科614種、チョウ類9科41種を見いだした。

城山や離島については過去の調査記録があるものの、宗像市全域にわたって昆虫類の調査が行われたのは今回が初めてである。

過去の記録や今回の調査結果を基に総合的評価を行う。

市内で最も重要な保全すべき地域としては、城山と沖ノ島がまずあげられよう。

城山はその豊かな自然林を持つことで、昆虫相も豊富で広範囲に及んでいる。セダカコブヤハズカミキリに代表される低山地では希な多くの種が発見されている。一方で海浜性のシロスジコガネ等の種も見られ、複雑な昆虫相を形成している。過去に詳細な調査がされているにもかかわらず、今回の調査でも多数の新たな種の発見があった。

沖ノ島は、対馬暖流上の小島で、暖流の強い影響と思われる種が多いことと、一方で、市内本土には見られないような山地性の種も多数発見されている。島嶼の場合、強い潮風と乾燥等、厳しい環境にあり、生息する種類は限られてくる傾向がある。一方で本土では見られない種が生息したり、異常に多い個体数を示したりすることがある。沖ノ島ではムモンチャイロホソバネカミキリやチャイロヒメカミキリ等に代表される暖地性の種、フタオビミドリトラカミキリやコマルキマワリに代表されるような山地性の種等が産し、セスジナガキマワリのように近くでは対馬からのみ知られるような種が多産する等、複雑な昆虫相を保っている。

地島遠見山一帯、大島御嶽一帯は、共に良好な自然林であり、それぞれ多くの貴重種を産している。地島では造られた登山道が荒廃し、乾燥が進んでいるようである。また、大島では山頂近くまで牧草地が広がる等、両島とも自然状態は楽観できない。

宗像市北西部は国定公園区域を含む自然海岸が広がり、ここには海岸砂丘独特の昆虫類が生息している。草崎半島からさつき松原にはニセマグソコガネ、セマルケシマグソコガネ、アカオオハナコメツキ等の砂丘特有の貴重な種が生息している。

城山と共に豊かな自然林を持つ許斐山は、スギ林の一部が山頂近くまで迫っているものの、山頂一帯の自然林では各種の昆虫がみられる。中にはベーツヤサカミキリ、キムネツツカッコウムシのような局地的な種も産する。

その他の調査域、武丸周辺台地、名残の谷池田、多礼貯水池周辺、孔大寺山山麓、樽見川上流は、いずれも水田や畑地周辺のわずかな雑木林であり、そこに産する昆虫類も学術的な意味での重要性は低いものが多い。ただ、昆虫類の生息条件というものは意外なほど少なく、それぞれの環境の中に数多くの種が生息している。

全体として、今回の調査地域は市内でも自然状態が比較的良好な地を選択しているが、どの調査地域でも調査者らの予想に反するほど多くの昆虫類が発見されたことを付け加えておきたい。